

ブタ一さまって誰のこと？ 豚好きもここまでくれば…

徳川慶喜は天保八年（一八三七）、水戸藩主・徳川斉昭の七男として江戸小石川の藩邸で生まれた。

父・斉昭は攘夷主義者ではあったが、進取性を持っており、牛を飼い、牛痘を試み、牛乳を飲み、時には肉を強壯剤として食していたという。

そのせいか斉昭には子供が多く、全部で三十七人もの子をなしている。

世子鶴千代磨（のちの徳川慶篤）以外は、順に二郎磨、三郎磨と名付け、慶喜は七郎磨である。十郎磨の次は余一磨と名付けたのはさすがに余禄と考えたのであろう。

しかし、さらに男子が生まれ、二十台に突入した。

二十番目は廿磨、二十一番目が廿一磨と続いた。人々は「おうし様」の力の偉大さに驚き入ったという。

斉昭は鶴千代磨以外は養子に出すつもりであり、事実、五郎磨は鳥取池田家、八郎磨は川越松平家、九郎磨は岡山池田家などを継いでいる。

慶喜は十四歳のとき御三卿の一つ一橋家を継いだが、このことが後の將軍就位へとつながる（水戸徳川家は副將軍役で、將軍継承権はなかった）。



慶喜は斉昭の牛好きと異なり、豚が好きだった。

当時の人々は彼のことを「ブタ一さま（豚を食べる一橋さま）」と呼び、半ばあきれ、半ば恐れられていた。

慶喜は、食べるだけでなく、自分でも実際に飼ってみたという。

山岡荘八『徳川慶喜』では慶喜に言わせている。

「食するだけでは罪が深い。よつて、どのような習性のものか見たいと申したら、市井の者が届けてくれたわ」

また、豚の効用を「これは、頭の先から尾の尖まで食せるうえに、毛から皮までことごとく役に立つ」と持ち上げ、さらに豚を食べないから夷人どもに侮られるのだとまで嘆かせている。

まさに「ブタ一さま」の面目躍如たるものがある。